強制配転を鋭く追及
四山では指名ストを指令

一月十八日、三川鉱の配転団交の決裂によって、会社は翌十九日から一方的に三川、四山、宮浦各鉱で配転強行を申入れた。不当に首を切った穴埋めの配転は、絶対認めるわけにはいかない。二十日三川、四山鉱では一番方から配転強行がおこなわれたが、組合指令通りこれを拒否して、繰込みがおこなわれた。しかし四山鉱では平常繰込いぜんに強制配転に応じて入坑していた者があつたので、指名ストでこれに対抗し、その他は全員が組合指令通り、業務命令を拒否して繰込み、就業した。

繰込場で強制配転に抗議する組合員（四山）

業務命令を拒否

十九日、三川鉱では業務命令書で一五九名、四山では口頭で約一〇〇名の配転を申入れ、二十日から一日からの配転を強行して来たので、二十一卸へ部内移動と同時に配転を強行して来たわけである。

配転の業務命令書は全部組合にあつめられた。

会社は二十日各番方とも配転計画通り繰込ませようとしたが、組合はこれを拒否、従来通りの作業につく意志を各人が係員に表明して入坑した。

二十一卸部内では積口工三名の配役をめぐつて対立した。会社は開発部内より配役、組合は本層下部内からの移動であるから、当然本層下部内での積口工だと追及して三名を配役させ、就業した。

繰込前に入坑

【四山】常一番関係では坑外（外特）から二名坑内（仕繰）へ、坑外厩場から厩場へ十名、電気部内一名の配転繰込みを追及して、従来通りの配役をおこなわせた。

ところが一番方で、(1)三卸カツペ部内に一名（機械当番）が配役入坑しようとしたので説得し、指名ストに入れる。

(2)三卸部内で二名（内機、仕繰）が能充工に配転され、繰込みいぜんに入坑していたので、指名ストに入れる。

(3)十昇カツペで平常繰込みいぜんに配転入坑していた二名を発見、このため平常通り入坑した四十二名が説得をおこなつたが聞き入れられなかつたので、組合は紛争とそれによる保安、作業上の問題を考慮して四十二名を指名ストに入れ昇坑させた。なお、この二名についても指名ストに入れた。

(4)ホーベル部内で仕繰工一名が配転され、繰込みいぜんに入坑していたので指名ストに入れた。

(5)内機工一名が運搬工に配転され平常繰込みいぜんに入坑していたので指名ストに入れた。

以上のような配転入坑者に対しては、執行部が会社の命令を拒否するよう説得をおこない、午後一時二十分までに全員を昇坑させた。また坑外では、外特工一名が坑外運搬に配転されようとしたので説得したがついに指名ストに入れた。

大体以上のような事態が起つた。これらは会社職制による業務命令の一方的強行、強迫的圧力による一部の動揺であり、今後の組織づくりでさらに注意すべき重大問題である。各支部からはこの間、主婦を交えた約千名が支援にかけつけ、各番方とも繰込場で支援、激励をおこなつた。

二番方では外特、開発倉庫、十昇カツペ部内、ホーベル部内、測量でそれぞれ配転入坑したので五名を指名ストに入れた。

三番方では、激しく強制配転に追及をおこなつて従来通り配役した。

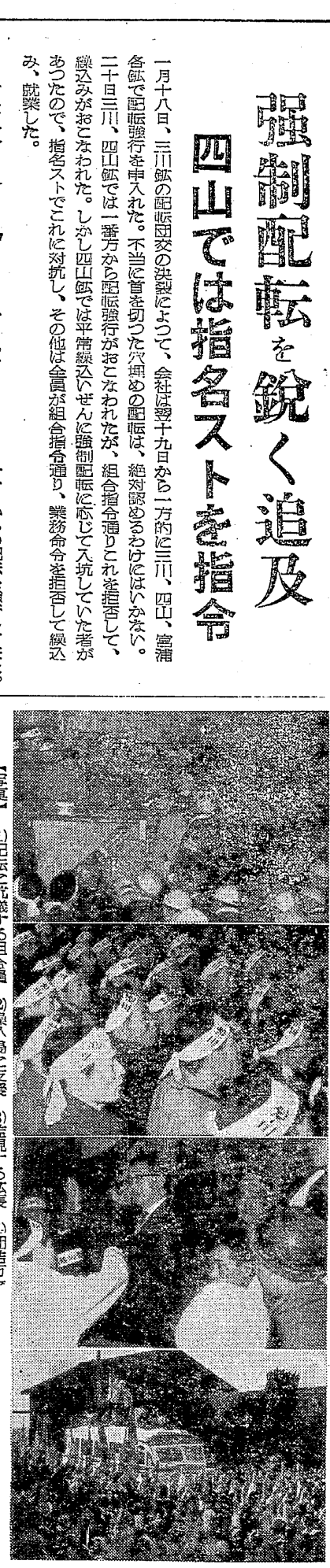
不遜な鉱長の態度

こうしてこの日は強制配転に対する鋭い追及を行い、業務命令を拒否して従来通り繰込んだが、前記のような指名ストも発せられた。

この日、四山黒瀬鉱長は各番方の繰込みに姿を見せ、配転強行の監視役に当つていたが、その態度が全く不遜で挑発的であり、組合では会社には反省を求めるとともに、このような紛争の原因をつくらぬよう大衆抗議をおこなつた。

【宮浦】業務命令書を二十七通発送した。二十一日一番方以降、常一番の仕繰工を採炭に配転しようというものであるが、組合では激しく追及して従来通り繰込み配役した。

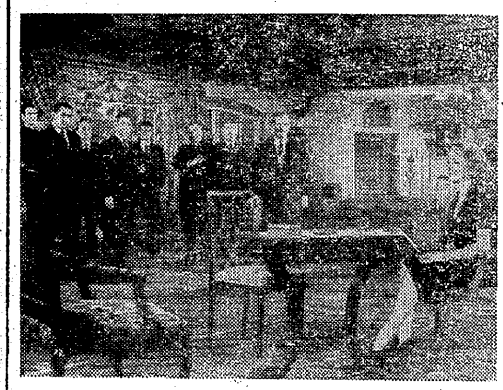
【写真】(1)配転に抗議する組合員 (2)繰込場に支援 (3)監視する鉱長 (4)団結万才



映画
レジスタンス推理劇
フランス映画 自殺への契約書

戦争中、対独レジスタンスのグループに属していたダニエル・ダリューは、いまファッション、ハウスを経営している。一人のドイツ人バイヤーが訪問、彼はかつてナチ秘密警察員で、あのころ彼女のグループが秘密警察の手入れを受け、リーダーが殺されたのは、グループの中に内通者がいたからだとうちあける。彼女は殺されたリーダーを憎していた。

真相を知つたダリューは裏切者への報復を決心、当時の生存者全員を夕食に招待する。その会場は襲撃をうけた因縁の場所である。夕食が終ると、彼女は出席者にこういう。「生き残つたのは、あなた方と私を加えて十一名。この中に卑劣な者が一人まじつていますそいつをいま見つけ出さねばなりません」さて、裏切り者はだれだつたのか？

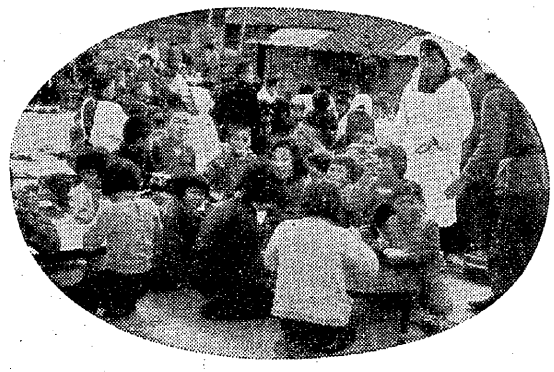


ジュリアン・デュビビエ監督のサスペンスもので、「十二人の怒れる男」と同様、舞台は別荘の一室だけ。しかもそこでの経過一時間三十九分がそのまま上映時間という徹底した特異な手法だ

デュビビエ監督は女の執念のおそろしさ、さらにレジスタンスを題材にサスペンスものを成りたたせて、フランス人の土性骨を見せ、映画ならではのダイゴ味をたんのうさせてくれる。

（二十四日―二名画座）

私達も頑張ろう
大平で子供ぜんざい会



〝お父さん、お母さんぼんとうに有難う〟と云える一月十七日、四山支部大平地域分会では「子供ぜんざい大会」が分会員、主婦会員に見守られながら、有意義におこなわれた。

ご承知のように、正月三日地域分会では団結餅搗化の「ぜんざい大会」を実施したが、あいつぐ総評の同志からの団結餅の贈りものをうけ、こんどは子供たちを主体にふたたび「ぜんざい大会」をおこなうことになつたのである。

この大会では親と子の意思統一をおこない、さらに団結を固めあつた。

「お父さんたちの闘いは今からまだまだながくつづくが、会社はほんとうに、お父さんたちだけでなく、子供の皆さんたちにまで、心配をかけ迷惑をかけています。皆さんたちは勉強だけしつかりしてよい子になるように努力すればよいのですが、今では生活のことまで心配かけています。何も知らない皆さんたちまで苦しめる会社は断じて許すことはできません」と分会のおじさんから挨拶があれば、子供たちは言葉にこそ出さないが、じつと見つめる無邪気な童顔には、ありありと決意のほどがうかがわれた。

きつと、父や母が動員に出ても留守は立派に守るし、小遣のことも十円を五円に、五円をゼロに節約することだろう。

こうして、この日の「子供ぜんざい大会」は和やかなうちに、有意義に終つたのである。（大平地域分会発）

（写真は大平分会提供）

文化人ら相つぎ来山
佛人記者や佐多稲子氏

総評では三池労組の闘いへの支援と、不当ロック・アウト対策のため、文化人、法律学者などどつぎつぎと三池へ送りこむことにしているが、文化人オルグの第一陣として二十二日作家の佐多稲子さんが来山した。佐多さんは、四山鉱での業務命令拒否の入坑状況を繰込場で激励、いご各地域をまわつて座談会などひらき、闘争の実相を見聞して歩いた。

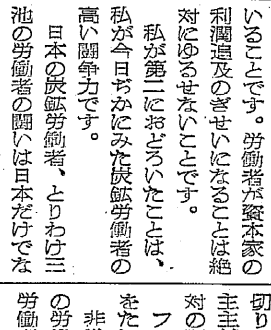
また、二十二日フランス「ユマニテ」紙北京特派員のジャン・エミール・ビダル氏も来山した。

日本の炭鉱労働者の実態調査、とくに中心になつて闘つている三池の実態と、独占資本に犠牲になつて廃坑にをつている炭坑地帯の実状を調査するため来日したものであり、来山とともに各地域をまわり、三鉱労組の鉢巻をしめ激励をおこなつた。編集部ではつまつた両氏のスケジュールを割いてもらつて、感想を述べて貰つた。

組合を信頼している

佐多稲子

三池に来て一番感じたのは「やつぱり来てよかつた」と思つたことです。主婦や拒否者の方とも座談会をしましたが、みんなが組合を非常に信頼していらつしやる、これは大きなことですね。



闘いは過激ではない

いろいろ話合つていると、皆さんが気負い込んではいないかと自問していらつしやるが、それだけ細かな配慮をされているのだと思い尊敬しました。私は皆さんが心配されているようなことはちつとも感じませんでした。

例えば商店ストに対する問題等で皆さんの話を聞いていますと闘争に対する感じが非常にジカの感情で憎しみがあります。闘争が過激ではないかと心配されるのもそこから来ているのでしようが、自由と人権に対する怒りというものが、率直にジカの感じだと思つています。それで非常によく気持がわかります。

それより昨日の話で感じたことは、拒否者とそうでない人との間に感情のズレが全然ないことをいわれました。それは自分の問題だからだと、いわれました。今日解雇通告を受けなかつたとしても、明日はどうだろう。そういう自分の感情からズレがないのだと思いました。

高い闘争力に驚く

ジャン・エミール・ビダル

私が第一におどろいたのは、炭鉱労働者の賃金がひくいことです

三井資本は非常に赤字があるといつているが、それはゴマカシです。フランスでは炭鉱労働者の賃金は日本よりも高い。そして炭鉱は全部国営です。それでも資本家は結構分配利潤をあげています。

三井が〝赤字克服〟という口実でクビ切り・合理化をやつているのはもつと利潤をあげようとしていることです。労働者が資本家の利潤追及のぎせいになることは絶対にゆるせないことです。

私が第二におどろいたことは、私が今日までかいみた炭鉱労働者の高い闘争力です。

日本の炭鉱労働者、とりわけ三池の労働者の闘いは日本だけでなく、ひろく世界の労働者にも知られています。

もちろん独占資本は強い。そして闘いは時として非常に苦しい困難なこともあるものです。しかし結局最後には労働者の方が資本家よりも強くなるのです。

今日、私が直接四山でみた抗議行動は、労働者の力をはつきりと表明していました。

私はこれから「ユマニテ」（フランス共産党機関紙）に速こうとする記事で、フランスの労働者に三池の労働者のことをしらせます非常に困難を長い闘争のことを書きます。たくましく力強い三池の労働者のことを書きます。

フランスの労働者は三池の労働者を誇りに思うと私は信じます。

私は、首切りに反対して闘つている三池の労働者の闘争の成功をいのります。

資本家は「サボをする人」を首切るといつていますが。しかし「サボをする人」は、本当は資本家なのです。

私は東京で安保改定阻止のためのデモをみました。それは日本の民主主義を尊ぶ強い気風をしめしていました。

日本の労働者の闘いは、単に首切りに反対するばかりでなく、民主主義を守るための闘い、原爆反対の闘いの模範をしめしています

フランスの人民は、日本の人民をたいへん尊敬しています。

非常によく組織されている日本の労働者の闘争力はひろく世界の労働者の模範です。

文化工作隊が活躍

闘いも、いよいよロツク・アウトをむかえ、闘いの場は地域闘争本部を中心に移つていくが、本部では構想を練つていた「文化工作隊」をこんご各地域で活躍させることになつた。

この隊は、劇・コーラス・詩の朗読など各種目にわたつて編集されたもので、ちかく最終打合せを終り、活動に入る予定である。

これは立派なことです。ふつう自分のことというのは、狭くなりがちなのに、こんどの場合は自分のことが正しくいかされている、自分についての考えがぜんぜん違つているということを、つよく感じました。四山鉱の繰込場に行きましたが主婦の方も沢山動員されて来ていらつしやつたが、ヤマの生活は家庭と仕事場が非常に密接しているということを感じました。

全体を通じてとくに感じたのは非常に皆さんが組合を信頼しているということで、下部までこれが浸透していることです。